

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：54401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01001

研究課題名（和文）高専等におけるポートフォリオ・システムの効果検証

研究課題名（英文）Verification of the Effectiveness of the Portfolio System in Technical Colleges

研究代表者

北野 健一（KITANO, Ken'ichi）

大阪公立大学工業高等専門学校・その他部局等・教授

研究者番号：20234263

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：6年でのべ34回のワークショップを開催し、ポートフォリオの作成者や導入機関を増やすことに成功した。今回、研究期間中にコロナ禍になったため、それまでの対面式ワークショップをオンラインに変更して開催できないか検討し、ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを日本で初めて開催することに成功した。

また、オンラインでもそれまでの対面式ワークショップと同程度の効果が得られることをアンケートから検証した。

さらに、ティーチング・ポートフォリオが初等中等教育を担う教員に対する研修になり得るか検討し、ティーチング・ポートフォリオ・チャートが研修として最も可能性が高いことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学校現場では、教員の年齢層に大きな偏りがあることが前々から指摘されてきた。小中高では、1980年頃に採用された教員が多いが、今その年齢層の教員が定年退職を迎えており、若い教員が多く採用されている。そのため、かつてのようなベテラン教員から若手教員への知識・技能の伝承が必ずしもうまく図られていない状況にある。今回の成果の一部は「メンター方式の研修の先進的事例」であり、このポートフォリオ・システムを全国の学校で取り入れることにより、日本の教育力を格段に向上させる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：A total of 34 workshops were held over the six-year period, successfully increasing the number of portfolio creators and institutions introducing them. In addition, due to the occurrence of the coronavirus pandemic during the study period, we examined the feasibility of changing the previous face-to-face workshops to online workshops, and succeeded in holding the first online workshop for teaching portfolio creation in Japan.

Feedback obtained through a questionnaire confirmed that the online workshop was as effective as the face-to-face workshop. Furthermore, we examined whether teaching portfolios could be used as training for teachers in primary and secondary education, and found that teaching portfolio charts had the greatest potential for use as training.

研究分野：工学教育

キーワード：ティーチング・ポートフォリオ アカデミック・ポートフォリオ ファカルティ・ディベロップメント
高等専門学校 ワークショップ メンター メンティー メンタリング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

ティーチング・ポートフォリオ (TP) とは「自らの教育活動について振り返り、その自らの記述をエビデンスによって裏付けた厳選された記録」であり、通常は3日間程度のワークショップで、すでに TP を作成した教員（「メンター」と呼ばれる）の助言を受けながら、12~15 時間かけて A4 8~10 枚程度の文書を作成する。特徴としては、内省、エビデンスによる裏づけ、柔軟性、厳選された情報の集積の4点がある。TP は教育業績を評価するツールとして主に北米で普及したが、日本ではファカルティ・ディベロップメント (FD) の一手段として注目を集めている。大学・短大・高専では、FD の努力義務化、義務化に伴い、講演会や学生による授業評価、教員間での授業参観などが導入されたが、どれも形式的なものにとどまっており、実質的な効果があがっているとは言い難く、効果的・実質的な FD 活動を行うことが、2008 年 12 月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」の中で求められた。

それに対するひとつの方法として TP を用いて教育改善活動を行うことが、効果的であると考え、大阪府立大学高専（現 大阪公立大学高専）は、2009 年 1 月、全国の高等教育機関で初めて単一教育機関内 TP 作成ワークショップ (WS) を開催した。その後も FD 活動として、現在まで継続的に TP に取り組んでいる。また、2011 年度からは、教育・研究・サービス活動のすべてを包括したアカデミック・ポートフォリオ (AP)、2012 年度からは、事務職員のスタッフ・ポートフォリオ (SP) にも取り組んでいる。本研究課題申請時の 2016 年 10 月には、TP 作成 WS を 16 回、AP 作成 WS を 10 回、SP 作成 WS を 5 回、TP 更新 WS を 7 回開催し、TP 作成者は 137 名、AP 作成者は 47 名、SP 作成者は 12 名であった。また、コロナ禍前であったため、すべての WS は対面式で実施していた。

2. 研究の目的

本研究課題申請時の 2016 年 10 月まで、TP、AP は高等教育を担う教員しか執筆していなかった。本研究は初等中等教育を担う教員にも門戸を広げ、小中高の教員に対して TP の普及に努め、TP の教員研修としての可能性について検討することを目的とした。初等中等教育を担う教員は、免許状更新講習や 10 年経験者研修など、種々の研修が課せられているが、TP がそれらの代わりになる可能性について検討した。ただし、通常の TP 作成 WS では、メンターと呼ばれる過去に TP を作成した教員 1 名が、メンティーと呼ばれる作成者を 1~3 人を担当し、1 回 1~1 時間半程度の個人メンタリングを 3 日間で 4 回実施するため、メンター数に対するメンティー数は最大でも 3 倍までである。一方、教員研修では、講師 1 名に対して受講者が 3 名までということは決してなく、講師 1 名に対して受講者は数十名から、下手をすると数百名になることもあるため、TP の構成要素である教育の理念-方法-エビデンス-（短期&長期）目標を 1 枚のシート (TP チャート) に整理し、それをもとに A4 1~2 枚程度の文書 (ティーチング・ステートメント (TS)) を作成する方法についても模索することとした。TP、TP チャート、TS と、初等・中等・高等教育機関すべてを対象とするポートフォリオ・システムを作ることで日本の教育力向上を目指すことを最終の目的とした。

なお、研究期間の途中でコロナ禍となったため、従来の対面式 WS を開催することが困難となった。そこで、研究の目的を変更し、コロナ禍でも TP、AP を普及するために、同等の WS をオンラインで開催できないか模索した。

3. 研究の方法

WS を開催し、WS の参加者に対して事後にアンケート調査を行い、そのアンケートを解析することで研究を進めた。

4. 研究成果

(1) 日本初となる TP 作成オンライン WS の開催

研究期間である 2017~2022 年度に、TP 作成 WS11 回、AP 作成 WS10 回、SP 作成 WS3 回、TP 更新 WS2 回、TS 作成 WS3 回、TP チャート作成 WS5 回、計 34 回の WS を開催した。表 1 に開催した TP 作成 WS、表 2 に開催した AP 作成 WS の概要を示す。特徴としては、コロナ禍前の 2017 年度~2019 年度に開催した WS はすべて対面式で、2020 年度~2022 年度に開催した WS はすべてオンラインということである。なお、2020 年 9 月に開催する予定であった WS はコロナ禍の一斉休校による学事歴の変更により中止となった。その代わりに、TP 更新 WS をオンラインで開催し、TP 作成 WS をオンラインで開催する場合に生じるとされる問題点の抽出を行った。抽出された問題点を表 3 に、それに対する主な対応策を表 4 に示した。

表 4 に示した対応策を元にスケジュールを検討し、2020 年 12 月 26~28 日に日本初となる TP 作成オンライン WS を開催することができた。実施した TP 作成オンライン WS の主なスケジュールを表 5 に、比較のために、2019 年度まで実施してきた対面式 WS の主なスケジュールを表 6 に示した。対面式 WS では第 1 日目が午後からのスタートであるのに対し、オンライン WS では午前からスタートとなっている点が大きな違いである。また、対面式 WS ではオリエンテーションの後に TP チャート作成を実施していたが、オンライン WS では、TP チャート作成に続いてメン

ティー同士が作成した TP チャートを共有する機会を設けた。対面式 WS では、メンター・メンティーの個人面談（メンタリング）は 3 日間で 4 回であるのに対して、オンライン WS では 3 日間で 5 回となっている。対面式 WS ではなかった 2 日目午後の中間発表を、オンライン WS では新たに設けている。オンライン WS におけるビデオ会議システムは Zoom を用いた。メンターがメンタリングの進め方の報告と検討を行うメンターミーティングも Zoom で実施した。また、個人面談（メンタリング）は、Zoom のブレイクアウトルームを用いて実施した。3 日目の「よりよいメンターになるために」は、対面式 WS では模造紙と付箋を用いて実施したが、オンライン WS では、Google Jamboard で実施した。

本校の WS では、メンター、メンティー、スーパーバイザー以外に、対面式 WS の時からコーディネータを設けている。コーディネータの業務は多岐に渡るが、対面式 WS ではメンティーの作業部屋や休憩室、食堂、個人メンタリング用の部屋や昼食の確保、買い出しが主な業務であった。

対面式 WS での主な業務は、オンライン WS では必要なくなったものの、Zoom や Google Classroom, Jamboard の立ち上げ、突発的な回線トラブルへの対応等が新たにコーディネータの業務として加わった。

表 1 2017～2022 年度に開催した TP 作成 WS の概要

開催年月日	回	形式	メンティー	メンター
2017. 8. 8～10	第 18 回	対面式	6 名(内学外 6 名)	4 名(内学外 1 名)
2017. 12. 26～28	第 19 回	対面式	10 名(内学外 8 名)	10 名(内学外 2 名)
2018. 9. 5～7	第 20 回	対面式	7 名(内学外 4 名)	7 名(内学外 2 名)
2018. 12. 25～27	第 21 回	対面式	8 名(内学外 7 名)	8 名(内学外 3 名)
2019. 9. 10～12	第 22 回	対面式	7 名(内学外 4 名)	7 名(内学外 2 名)
2019. 12. 25～27	第 23 回	対面式	9 名(内学外 9 名)	9 名(内学外 6 名)
2020. 12. 26～28	第 24 回	オンライン	6 名(内学外 4 名)	6 名(内学外 3 名)
2021. 9. 6～8	第 25 回	オンライン	4 名(内学外 2 名)	4 名(内学外 3 名)
2021. 12. 26～28	第 26 回	オンライン	10 名(内学外 10 名)	10 名(内学外 5 名)
2022. 9. 6～8	第 27 回	オンライン	5 名(内学外 4 名)	5 名(内学外 3 名)
2022. 12. 26～28	第 28 回	オンライン	4 名(内学外 4 名)	4 名(内学外 3 名)

表 2 2017～2022 年度に開催した AP 作成 WS の概要

開催年月日	回	形式	メンティー	メンター
2017. 8. 8～10	第 12 回	対面式	7 名(内学外 2 名)	6 名(内学外 3 名)
2017. 12. 26～28	第 13 回	対面式	1 名(内学外 1 名)	1 名
2018. 9. 5～7	第 14 回	対面式	3 名(内学外 1 名)	3 名(内学外 2 名)
2018. 12. 25～27	第 15 回	対面式	4 名(内学外 4 名)	4 名(内学外 1 名)
2019. 9. 10～12	第 16 回	対面式	2 名(内学外 1 名)	2 名(内学外 1 名)
2019. 12. 25～27	第 17 回	対面式	3 名(内学外 3 名)	3 名(内学外 1 名)
2021. 9. 6～8	第 18 回	オンライン	3 名	3 名(内学外 2 名)
2021. 12. 26～28	第 19 回	オンライン	1 名(内学外 1 名)	1 名(内学外 1 名)
2022. 9. 6～8	第 20 回	オンライン	4 名(内学外 3 名)	4 名(内学外 2 名)
2022. 12. 26～28	第 21 回	オンライン	2 名(内学外 2 名)	2 名

表 3 TP 更新 WS で抽出された問題点

<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインの個人メンタリングで、どこまでメンティーの振り返りを促すことができるか（信頼関係を構築できるか） ・メンティー同士や、担当メンター以外のメンター及びスーパーバイザーとの交流機会が少ない（茶菓コーナーがない、意見交換会はオンラインでしかできない） ・オンラインだと他者の目がないので、メンティーの緊張感をいかに保つか ・突発的な回線トラブルへの対応
--

表 4 主な対応策

<ul style="list-style-type: none"> ・個人メンタリングの回数を 3 日で 4 回から 3 日で 5 回に増やす ・日程を 2 日半から 3 日に延ばす ・1 日日夜の意見交換会をこれまでの任意参加から、原則全員参加とし、ブレイクアウトセッションでメンティーだけの部屋を 20 分くらい作る ・2 日目の昼食後に、中間発表の時間を新たに設ける ・1 日目朝 TP チャート作成時に、メンティー同士がチャートを共有する機会を設ける ・いつでも雑談できる「談話室」を Zoom 上に設置する ・メンター全員が全メンティーの進捗を把握するため途中稿は、全体の Google Classroom に提出する ・回線トラブル対応のため、ビデオ会議システムに 3 日間専任の担当者を設ける ・いつもは TP/AP/SP 作成 WS を同時に開催しているが、今回は TP 作成 WS 一本に絞る

表5 TP作成オンラインWSの主なスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前	オリエンテーション チャート作成	個人メンタリング(3) TP作成作業	個人メンタリング(5) TP作成作業
午後	個人メンタリング(1) TP作成作業 個人メンタリング(2)	中間発表 TP作成作業 個人メンタリング(4)	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	意見交換会 TP作成作業	TP作成作業	修了を祝う会

表6 TP作成WS(対面式)の主なスケジュール

	第1日	第2日	第3日
午前		個人メンタリング(2) TP作成作業	個人メンタリング(4) TP作成作業
午後	オリエンテーション チャート作成 個人メンタリング(1) TP作成作業	個人メンタリング(3) TP作成作業	TP作成作業 プレゼン準備 TPプレゼンテーション 修了式
夜間	夕食会 TP作成作業	TP作成作業	修了を祝う会

WSに関するGoogle Classroomを2つ立ち上げ、1つは参加者全員、もう1つはメンターのみアクセス可能とした。WSの資料とメンターのTP、カバーページは参加者全員がアクセスできるGoogle Classroomにアップした(ただし、印刷不可)。また、作成途中のメンターのTPはGoogle Classroomにアップしてもらうこととし、すべてのメンターとスーパーバイザーが閲覧可能とした。

なお、2020年12月26～28日に本校が実施したTP作成オンラインWSが、日本初のTP作成オンラインWSであるが、その後2022年度末までに、芝浦工業大学、県立広島大学、追手門学院大学、千里金蘭大学などが、TP作成オンラインWSを開催している。新型コロナの感染症法上の位置づけが「2類相当」から「5類」に移行した本年は、再び対面式WSの開催を模索しているところである。

(2) TP作成オンラインWS参加者アンケートの結果

WSの改善を目的として、毎回WS終了後に、参加者(メンター)に対して、事後アンケートを実施している。今回、対面式WSからオンラインWSに移行して実施したことの評価に、このアンケート結果を用いた。

アンケートは第3回TP作成WSから継続して同じものを用いており、設問数は26(多肢選択式17、自由記述9)である。

分析にあたり、多肢選択式設問の回答「そう思う(4)」、「どちらかといえばそう思う(3)」、「どちらかといえばそう思わない(2)」、「そう思わない(1)」を()内の数値に置き替え、対面式WS参加者の回答と比較した。結果を表7および表8に示す。

表7 TP作成におけるオンラインWSと対面式WSの参加者アンケートの比較(4点満点)

質問項目	オンライン(n=27)	対面(n=136)
自身のキャリアにとって有意義な内容だったか	3.85	3.64
メンターからの助言は役に立ったか	3.89	3.86
自身の教育改善につながるか	3.81	3.65
全体的に満足できたか	3.89	3.78

表8 AP作成におけるオンラインWSと対面式WSの参加者アンケートの比較(4点満点)

質問項目	オンライン(n=6)	対面(n=41)
自身のキャリアにとって有意義な内容だったか	4.00	3.76
メンターからの助言は役に立ったか	4.00	3.80
自身の教育改善につながるか	3.83	3.63
全体的に満足できたか	4.00	3.88

表7および表8より、オンラインWSであっても対面式WSと同程度(ないしはそれ以上)の効果があることがわかった。ただし、回答数が少ないため、有意差の確認は行っていない。

WS最終日にメンターから意見を伺う機会があった。その際に出た意見を表9にまとめた。当

初、対面でのメンタリングに比べ、オンラインでのメンタリングは難しいのではないかと危惧していたが、少なくともメンター側は対面と同じようにできると感じていることがわかった。また、対面だとメンティーに気兼ねしてメモが取りにくいことがあるが、オンラインでは手元が見えないためメモが取りやすいという意外なメリットも見い出すことができた。

表9 オンラインWSのメリット・デメリット（メンター側の評価）

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> ・時間が守られる ・メンタリングの時にメモを取りやすい ・移動時間がない ・メンタリングそのものは対面の場合と同じようにできる 	<ul style="list-style-type: none"> ・メンタリング以外の時間にちょっとした（インフォーマルな）声かけができない ・担当以外のメンティーと言葉を交わす機会がない ・ネット環境が途切れた時に自分だけか全体なのかわからない

(3) 初等中等教育を担う教員に対する研修としての可能性

①TP チャート

TP チャートとは、教師としての教育活動を振り返って自分の理念を見出し、その理念を活動の方針や方法とひも付けて教育活動を見直すための1枚のワークシートを指す。通常はA3版の紙に印刷されたワークシートと、付箋を用いて作成する（最近ではプレゼンテーションソフトを用いたデジタル版も開発されている）。思い出したことを付箋に書いて貼ることにより、活動を整理し、自分の理念を軸に活動をとらえ直すことができる。TPチャートは1人でも作成することができるが、できれば作成WSに参加して、他者と対話しながら作成することを勧めている。

2018年5月13日に日本高専学会セミナーとして、TPチャート作成WSを本校で開催した。参加者は37名で、うち小中高教員は9名(24%)であった。

WS終了後に事後アンケートを実施した。小中高教員からの回答(抜粋)を以下に示す。

・高校教員にとっては、TPチャートがちょうどよいボリュームで、研修のテーマとなり得ると思った（授業改善を主眼にしたときに）。教職経験のある程度積んだ後にできて、これからの教育活動に役立つと思いました。

・理念がはっきりしてスッキリしました。校内研修でも導入したいと思いました。

このことから、TPチャートは小中高教員に対する研修のテーマとなり得ることがわかった。

②TS

2019年4月27～28日にSORAの会の協力を得て、TS作成WSを大阪で初めて開催した。会場は枚方市立メセナ枚方会館の研修室、参加者は7名（小学校教諭2名、高等学校教諭3名、大学教員2名）であった。

WS終了後に事後アンケートを実施した。小中高教員からの回答(抜粋)を以下に示す。

・言語化により、理念と方法・方針の構造化を図ることができた。

・TPチャート→TSで整理され、さらに深まる気がした。

・TPチャートよりも、自分の考えが明確になった。

TPチャートは付箋だけであるが、TSで文章化（言語化）することによって、より大きな振り返りが実現することがわかった。

③TP

研究期間に本校で開催したTP作成WSにおいて、2017年度の高等学校教諭1名、2018年度の小学校教諭1名、2019年度の小学校教諭1名、2020年度の私立中高一貫校教諭1名、2021年度の私立中高一貫校教諭1名、計5名がTPを作成した。これにより初等中等教育を担う教員も3日間が確保できれば、TPが作成できることがわかった。

(4) 日本におけるAP/TPのメッカとしての役割

研究期間が終了した2023年3月末には、TP作成者は学内外あわせて227名、AP作成者は学内外あわせて79名、SP作成者は学内外あわせて19名となった。現在、日本国内におけるAPの作成者は約200名、TPの作成者は約1100名と推測されており、日本国全体におけるAP作成者の約4割、TP作成者の約2割が本校でAP/TPを作成していることになる。本校は「日本におけるAP/TPのメッカ」としての役割を十分果たしてきたと言える。

また研究期間中に、日本高専学会年会講演会、TP研究会およびのべ20大学で、AP/TPをはじめとする各種ポートフォリオに関する発表・講演を行い、普及に努めた。

<引用文献>

① ピーター・セルディン著、大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「大学教育を変える教育業績記録」、玉川大学出版部、2007。

② 栗田佳代子・吉田墨著、「リフレクションを可視化するティーチング・ポートフォリオ・チャート作成講座」、医学書院、2021。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 加藤由香里, 井上千鶴子, 山下哲, 石丸裕士, 上野哲, 鯉坂誠之, 東田卓, 金田忠裕, 土井智晴, 和田健, 早川潔, 古田和久, 北野健一	4. 巻 26-3
2. 論文標題 TPワークショップにおけるメンター教員の学び	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 北野健一, 井上千鶴子, 谷野圭亮, 古田和久, 鯉坂誠之, 山下哲, 長水壽寛, 山川修	4. 巻 55
2. 論文標題 日本初ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 井上千鶴子, 古田和久, 土井智晴, 東田卓, 鯉坂誠之, 石丸裕士	4. 巻 54
2. 論文標題 2019年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 北野健一, 加藤由香里	4. 巻 54
2. 論文標題 2019年度スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 37-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鯉坂誠之、東田卓、辻元英孝、室谷文祥、栗田佳代子、加藤由香里	4. 巻 53
2. 論文標題 2018年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上千鶴子、谷野圭亮、北野健一、古田和久、川上太知、東田卓、石丸裕士	4. 巻 53
2. 論文標題 2018年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤由香里、東田卓、金田忠裕、北野健一、古田和久、早川潔、和田健、倉橋健介、石丸裕士、土岐智賀子、山下哲	4. 巻 12(1)
2. 論文標題 Awareness of Mentors in the Peer-Mentoring Conferences	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal for Educational Media and Technology	6. 最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤由香里、東田卓、金田忠裕、北野健一、山下哲、土岐智賀子、石丸裕士、古田和久、早川潔、和田健、倉橋健介	4. 巻 23(3)
2. 論文標題 TPワークショップでのピア・カンファレンスを通じたメンター教員の成長	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本高専学会誌	6. 最初と最後の頁 33-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東田卓; 鯉坂誠之; 金田忠裕; 北野健一; 坂井二三絵; 佐藤修; 西岡求; 古田和久; 松野高典	4. 巻 52
2. 論文標題 2017年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古田和久; 井上千鶴子; 北野健一; 土井智晴; 中谷敬子; 和田健; 東田卓; 鯉坂誠之	4. 巻 52
2. 論文標題 2017年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 77-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金田忠裕; 北野健一	4. 巻 52
2. 論文標題 2017年度スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北野健一; 東田卓; 栗田佳代子	4. 巻 51
2. 論文標題 2016年度スタッフ・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 71-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井上千鶴子、谷野圭亮、古田和久、和田健、早川潔、倉橋健介、東田卓、鰐坂誠之、石丸裕士	4. 巻 51
2. 論文標題 2016年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 65-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 北野健一、伏見裕子、勇地有理、古田和久、東田卓、山下良樹、栗田佳代子	4. 巻 53
2. 論文標題 2021年度アカデミック・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪公立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 土井智晴、北野健一、稗田吉成、谷野圭亮、井上千鶴子、野田達夫、東田卓、鰐坂誠之	4. 巻 53
2. 論文標題 2021年度ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ開催報告	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪公立大学工業高等専門学校研究紀要	6. 最初と最後の頁 17-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 北野健一、井上千鶴子、谷野圭亮、古田和久、鰐坂誠之、山下哲、長水壽寛、山川修
2. 発表標題 ティーチング・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して
3. 学会等名 日本高専学会第27回年会講演会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北野健一
2. 発表標題 オンラインTPWS開催報告・大阪府立大学高専の場合
3. 学会等名 第2回TP研究会総会（オンライン）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 北野健一、阪本龍馬、阪本富美江、栗田佳代子、吉田壘
2. 発表標題 ティーチング・ステートメント作成ワークショップを開催して
3. 学会等名 日本高専学会第25回年会講演会（仙台高専広瀬キャンパス）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北野健一
2. 発表標題 TPおよびTPチャートの導入事例
3. 学会等名 第1回TP研究会総会（オンライン）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 北野健一、金田忠裕、東田卓、栗田佳代子、吉田壘
2. 発表標題 ティーチング・ポートフォリオの初等中等教育への導入を目指して～TPチャート作成ワークショップを開催して～
3. 学会等名 日本高専学会第24回年会講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金田忠裕、北野健一、井上千鶴子、鯉坂誠之、栗田佳代子
2. 発表標題 ティーチング・ポートフォリオの活用に関する一考察～TP披露を通して～
3. 学会等名 日本高専学会第23回年会講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 加藤由香里、東田卓、金田忠裕、北野健一、山下哲、土岐智賀子、石丸裕士、古田和久、早川潔、和田健、倉橋健介
2. 発表標題 TP作成を支援するピア・カンファレンスにおけるメンターの成長
3. 学会等名 日本高専学会第23回年会講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 北野健一、鯉坂誠之、金田忠裕
2. 発表標題 地元企業と連携したスタッフ・ポートフォリオの作成
3. 学会等名 日本高専学会第23回年会講演会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金田忠裕、栗田佳代子、北野健一
2. 発表標題 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップにおけるメンタースキルの考察～ナラティブ・アプローチの観点から～
3. 学会等名 日本高専学会第28回年会講演会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 北野健一、金田忠裕、古田和久、東田卓、山下哲、竹元仁美、栗田佳代子
2. 発表標題 アカデミック・ポートフォリオ作成オンラインワークショップを開催して
3. 学会等名 日本高専学会第28回年会講演会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大阪公立大学工業高等専門学校 ティーチング・ポートフォリオ研究会 https://www.ct.omu.ac.jp/tppg/ ポートフォリオを活用した学生の学士力確保 http://www2-tp.ct.osakafu-u.ac.jp/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鯉坂 誠之 (AJISAKA Shigeyuki) (60634491)	大阪公立大学工業高等専門学校・その他部局等・准教授 (54401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	栗田 佳代子 (KURITA Kayoko) (50415923)	東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・教授 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------